

大学教育開発センター通信

2010年度
第2号
通巻第25号



CONTENTS

2010年度大学教育開発センター
FD報告会開催報告 2
 「第1回・第2回文学部FD研究会」(第4回・第6回FD報告会)
 「学生が“学び”を実感できる教育の実現をめざして」
 安藤 徹 (文学部FD活動推進委員会委員長)
 「第1回経営学部FD報告会」(第5回FD報告会)
 西川 清之 (経営学部教務主任)
 2010年度学部FD報告会開催実績

大学院FD活動紹介 4
 「文学研究科のFD活動の現状と課題」
 北村 高 (文学研究科教授)
 「法学研究科のFD活動の現状と課題」
 脇田 滋 (法学研究科教務主任)

学部FD活動紹介 6
 「社会学部のFD活動」
 山邊 朗子 (社会学部教務主任)
 「国際文化学部におけるFD活動の現状」
 清水 耕介 (国際文化学部教務主任)

研修参加記 8
 【報告1】日本私立大学連盟主催「平成22年度FD推進会議(新任専任教員向け)」に参加して
 渡辺 めぐみ (社会学部講師)
 【報告2】日本私立大学連盟主催「平成22年度FD推進会議キャリアガイダンスと教職員の職能開発～学生の自律を支援するFDとSD～(専任教職員向け)」に参加して
 原 俊和 (キャリア開発部課長)
 【報告3】米FDは教育強化と研究強化が両輪
 「2010年度夏季海外視察調査・研修」に参加して
 築地 達郎 (社会学部准教授)
 【報告4】京都FD開発推進センター主催「新任教員合同研修プログラム」の研修参加報告
 大原 盛樹 (経済学部准教授)

2011年度 学部FD・大学院FD
自己応募研究プロジェクト第二次募集のご案内 11

新着図書紹介 12

2010年度大学教育開発センターFD報告会開催報告

大学教育開発センターでは、各学部・研究科が実施するFD研修会を学内に公開してもらい、FD活動の取り組み状況や成果を全学に紹介する「FD報告会」を開催しています。今回は、2010年度に開催したFD報告会の内容をご紹介します。

「第1回・第2回文学部FD研究会」（第4回・第6回大学教育開発センターFD報告会）

学生が“学び”を実感できる教育の実現をめざして

安藤 徹（文学部FD活動推進委員会委員長）

2010年度の文学部FD研究会（兼、FD報告会）は、年間テーマとして「学生が“学び”を実感できる教育の実現をめざして」を掲げ、計2回開催しました。

第1回文学部FD研究会（10月27日）では、「カリキュラム・チェックリストの効用と課題」と題して、今年度はじめて作成に取り組んだカリキュラム・チェックリスト（CCL）にかんする意見交換を行ないました。その際、教員（委員）対象に実施したアンケートの結果も報告されました。CCLに対する共通認識がまだ十分に醸成されていないことなど、課題も浮き彫りになりましたが、「ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーの再検討、およびカリキュラム改善のためのツール」としてのCCLの位置づけを明確にできたことは、今後のFD活動にとってたいへん有益であったと考えます。

第2回文学部FD研究会（11月24日）は、「質の高い初年次教育をどのように実現するか」と銘打って、同志社大学商学部准教授の谷本啓氏に「同志社大学商学部の初年次教育—学生と教員の

「幸せな出会い」をどう達成するか」と題するご講演をいただきました。初年次教育は、文学部がいまもっとも強化したいと考えている課題です。それに対する先進的かつ体系的な取り組み事例を学べたことは、貴重な経験です。ただいっぽうで、「学生と教員の「幸せな出会い」」のためには教員側の意識・意欲や教育力が問われること、しかし実際には全教員が高い意欲やスキルを有しているわけではないこと、したがって一部の教員によって初年次教育を担うほうが学生にとって「幸せ」だという説明に対しては、正直に言えば、すぐに同意したくはないが反論もできない、という“にがみ”を覚えました。

学生が“学び”を実感できる教育を実現するために、FD活動をこれからどのように展開し、充実させていくか。私たちがすべきことは、厳しい現実を見据えつつ、ツールとしてのCCLの活用もふくめて、まずはできるものから一つひとつ実践していくことではないでしょうか。立ち止まっている余裕は、もうありません。

アドバイザーボード・小瀬（教学部長）のコメント

DPの今後の活用方法について示唆に富むものだったと思いました。昨年度来、各学部では「3つのポリシー」の策定にあたり、形にすることができたがそれは現状を表現するもので、完成をめざす途上のもとも言えます。その結果も大切ですが、作成・修正する過程そのものが、それぞれの先生方の認識を深める貴重な機会と再認識しました。

せっかくの機会（相当な労力を費やしたという意味でも）と思われるので、本研究会の成果を多角的に利用されればと考えます。また、その結果が学部内外への良いきっかけとなればと思いました。

また、カリキュラム・チェックリストの作成に参加された先生方が気付かれたことは、それぞれに的を射ていて、今後認識の共通点について意見がまとまれば、より新しい議論展開が期待できると感じました。

「第1回経営学部FD報告会」（第5回大学教育開発センターFD報告会）

西川 清之（経営学部教務主任）

経営学部では、10月27日（水）の昼休みの時間帯に、2010年度第1回FD報告会を、全学に公開し、実施しました。当日は、教員19名（報告者4名を含む）、事務職員6名の計25名が参加しました。

経営学部では、グローバル化する世界経済と変化の激しい時代に活躍できる人材の育成を重点目標として掲げています。そこで、こうした人材を育成するために、2008年度のカリキュラム改革で、基礎教育と理論教育を繋ぐ実習科目として4科目の「プログラム科目」を開設しました。科目コンセプトは「現場で学ぶ経営学」で、大連外国語大学との共同教育プログラム「現代中国のビジネス」、北海道網走にある東京農業大学生物産業学部との共同教育プログラム

「地域と企業」、企業見学を取り入れた「ものづくりの現場」、企業人を交えての「起業論A・B」がそれらの内容です。

本FD報告会は、上記科目の各担当者から実施状況等について報告していただき、教員間でプログラム科目に関する情報を共有することを目的としました。

「現代中国のビジネス」については夏目啓二教授、「地域と企業」については重本直利教授、「ものづくりの現場」については由井浩教授、「起業論A・B」については秋庭太准教授から、詳しい実施報告ならびに次年度に向けての課題等についての報告があり、次いで各報告に基づく質問会がもたれ、短い時間ではありましたが、活発な意見交換が行われました。

アドバイザーボード・伊勢戸康（教学企画部次長）のコメント

各プログラム科目の実施報告とともに、実施過程で見えてきた問題点や課題等が具体的に報告される中で、外国、企業、地域といった普段の教室とは違った「現場」で戸惑う学生の姿や、苦勞した中にも達成感を感じる学生の姿が目に見えてきました。同科目は、学生が以後の学修における自身の課題や目標などについて考える、良い機会でもあったと感じました。

本プログラム科目は、学生が学ぶ過程において、異なる背景、視点、価値観を持った人々と関わっていくことから、「コミュニケーション力」や「他者と協働する力」等を育成する場にもなっていると思います。このような場（機会）が激減したと言われる学生が多い中、このような学生参加型・体験型の科目は、現在に求められる授業形態のひとつだと思います。ただ、科目を準備する段階から担当教員の負担は少なくないことから、そのあたりを今後どのように進めていくのか、支援のあり方も含めて検討していく必要があると感じました。

2010年度学部FD報告会開催実績

学部	開催日時	テーマ	報告会の主な内容
文学部	2010年 10月27日(水) 16:30～18:00	第1回文学部FD研究会 テーマ:「カリキュラム・チェックリストの効用と課題 —学生が“学び”を実感できる教育の実現を目指して(1)—」 報告者:①「CCLと3つの方針について」安藤 徹氏 ②「教員アンケートの結果について」市川 良文氏	今年度、文学部としてはじめて取り組んだ「カリキュラム・チェックリスト (CCL)」の作成作業から浮かび上がる問題点などを論議しながら、学生が“学び”を実感できる教育に必要なカリキュラム改善の内容や方法について検討した。
	2010年 11月24日(水) 16:30～18:00	第2回文学部FD研究会 テーマ:「質の高い初年次教育をどのように実現するか —学生が“学び”を実感できる教育の実現をめざして(2)—」 講演テーマ:同志社大学商学部の初年次教育 —学生と教員の「幸せな出会い」をどう達成するか— 講師:谷本 啓氏(同志社大学商学部准教授)	今年度、文学部FD活動推進委員会の学修(教育)支援WGで論議した主要なテーマである初年次教育に着目し、先進的な取り組みをしている同志社大学商学部の谷本啓氏にご講演いただいた。講演終了後の質疑応答を通じて、学生が“学び”を実感できる初年次教育のあり方を模索した。
経済学部	2010年 12月15日(水) 15:30～16:30	第1回経済学部FD研究会 テーマ:「初年次教育における問題点と課題について」 報告者:①「入門演習」大前 眞氏 ②「基礎演習Ⅰ」小峯 敦氏 ③「マクロ経済学入門」川元 康一氏 ④「必修外国語」ドールトン・フランク E氏 ⑤「仏教の思想」藤丸 要氏	経済学部では新学科完成年度を迎え、その総括を行う時期となっている。今回は、新カリキュラム(2006年度以降入学生対象)における初年次の全員履修科目、及び必修科目において、個々の担当者が抱える問題点、授業運営での悩みなどを、一人当たり5分程度で発表し、その後意見交換を行い、今後の改善策について検討した。
経営学部	2010年 10月27日(水) 12:20～13:10	第1回経営学部FD報告会 テーマ:プログラム科目実施報告会 報告者:①「現代中国のビジネス」夏目 啓二氏 ②「地域と企業」重本 直利氏 ③「ものづくりの現場」由井 浩氏 ④「起業論」秋庭 太氏	経営学部では、グローバル化する世界経済と変化の激しい時代に活躍できる人材の育成を重点目標として掲げている。こうした人材を育成するために、2008年度のカリキュラム改革の際に基礎教育と理論教育をつなぐ実習科目として「プログラム科目」を開設した。今回の報告会では、今年度のプログラム科目の実施状況等について、各担当教員から報告してもらい、同科目に関する情報共有を図った。
法学部	2010年 11月24日(水) 15:00～16:30	第1回法学部FD報告会 テーマ:ブリッジセミナー法律学、アドヴァンスト司法セミナーについて 報告者:①「ブリッジセミナー法律学」鈴木 眞澄氏 ②「ブリッジセミナー法律学」河村 高志氏 ③「アドヴァンスト司法セミナー A」牛尾 洋也氏 ④「アドヴァンスト司法セミナー B」元山 健氏	法学部では、2008年度カリキュラムの編成にあたり、新たな学部プログラムとして「読み・考える・書く・話す」とプレゼンテーション能力の向上を目的としてブリッジセミナーを開講している。 また、専門教育では従来の一方方向の講義とは異なる双方向の中規模講義としてアドヴァンスト司法セミナーを開講しており、主体的な学修姿勢を身につけられるような講義を開講している。これらの法学部における初年次教育から専門教育への橋渡しの科目および特徴的な科目について、科目担当者から報告してもらい、同科目に関する情報共有を図ることを目的とし、本FD報告会を開催した。
理工学部	2010年 7月21日(水) 14:30～16:00	第1回理工学部・理工学研究科FD報告会 テーマ:6学科・専攻FD活動報告 報告者:①「数理情報学科のカリキュラム懇談会」 飯田 晋司氏(数理情報学科) ②「3年次特別研究の成果について」 小堀 聡氏(電子情報学科) ③「機械システム工学科におけるFD活動」 辻上 哲也氏(機械システム工学科) ④「物質化学科における教育改善への取り組み2009」 富崎 欣也氏(物質化学科) ⑤「藤田 和弘カリキュラム改革と特別支援教育」 三好 力氏(情報メディア学科) ⑥「分野別にみたカリキュラムフローチャート」 遊磨 正秀氏(環境ソリューション工学科)	理工学部・理工学研究科が独自に取り組んでいる教育活動やFD活動について、昨年度の取り組み状況や成果などを全学に紹介を行った。学科・専攻としての全般的な活動報告、学科独自のカリキュラムの説明、学生支援、教員の授業改善活動紹介などを行った。
社会学部	2010年 12月15日(水) 16:30～18:00	第1回社会学部FD報告会 テーマ:「初年次教育への取り組みについて」 報告者:①「社会学科」原田 達氏 ②「コミュニティマネジメント学科」古賀 和則氏 ③「地域福祉・臨床福祉学科」五十嵐海理氏 ④「社会学部学科ブックレット」田村 公江氏	社会学部では社会や入学生のあり方の変化に対応し、大学教育の導入である初年次教育の充実に取り組んでいる。まず、2008年度から各学科において、新入生用の少人数教育クラス(初年次ゼミ、初年次実習ゼミ等)や講義において活用するために、ガイドブックや初年次教育用教材を作成してきた。今回の報告会では、これらの教材と、それを生かした授業展開のあり方、さらに社会学部学会で作成している当学部教育に必要な基本文献の紹介等を内容とする「社会学部学会ブックレット」について報告した。
国際文化学部	2010年 6月16日(水) 16:00～17:00	国際文化学部FD研究会 テーマ:「公開授業実施後の意見交換会」	2010年6月7日(月)～6月11日(金)に実施された「国際文化学部公開授業週間」で、授業を公開した先生、及びそれに参加した先生から感想等をお聞きし、今後の国際文化学部における公開授業のあり方について意見交換をおこなった。
短期大学部	2010年 7月23日(金) 14:00～16:00	2010年度短期大学部FD報告会 テーマ:「社会福祉実習における事前事後指導について —利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成—」	社会福祉士養成の新カリキュラムでは、社会福祉士資格取得を目指す学生は実習において「利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成」について指導を受けることとなっている。このことをうけて、短期大学部は「利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成」についての指導のあり方を検討するためのプロジェクト・チームを、短期大学部FD委員会のもとに発足させ、「利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成」能力習得のための教育プログラムの開発、実習生が実習中に使用する書類の様式の作成などを行ってきた。今回のFD報告会では、本プロジェクト・チームでの活動の成果を報告し、参加者と共有するとともに、今後に向けた改善点などについて討議した。



大宮学舎

大学院 FD 活動紹介

文学研究科の FD 活動の現状と課題

北村 高 (文学研究科教授)

文学研究科の FD 活動は、文学部との連携を考えなければならぬ。大学院に進学する多くの院生は、龍谷大学文学部を卒業しており、学部教育と連続しているからである。また大学院の 8 専攻は、学部の学科・専攻の上に設置されているともいえる。しかし、大学院における講義は、学部のように相互に関連するものが少なく、各々の専攻で独立して実施されているものがほとんどである。だが、現実には、この学部との連続性が保持されているとはいいがたい面がある。この原因は、大学院に進学してくる院生の側にもある。大学院に進学する院生の中には、大学院進学時に、学部での学びを変更して新たな専攻に進む者がある。また学部卒業時に卒業論文を必須化していない学部や大学からの新生がいる。さらに、現今の不況下において、本来は就職すべき学生が、早々に就職活動をあきらめて大学院進学に進路を変更した学生の存在である。このような大学院生と、より一層自己の研究を深化させようと考えて進学した院生との間には、能力差や温度差が如実に現れてくる。

就職活動をあきらめて進学した院生は、大学院での講義や研究会に出席しても、本来の目的と異なるために、積極的に努力している姿勢が窺えない面がある。また卒業論文を書かずして大学院に進学した院生は、卒業論文作成という過程を経ないために、問題解決能力や論理的思考の下に文章作成する能力を育成する教育を受けていないことがある。一方、自己の選考を変更した進学者の中には、進学し

た専攻で学ぶために必要な基礎科目などを履修せずに入学した院生が存在する。

大学院進学時に専攻を変更した院生は、基礎的勉強をしていないために、原書を使用した文献研究やゼミでの研究発表などで苦勞し、よほどの努力を払わない限り授業などから疎外されてしまうことになる。多くの院生は、ゼミでの教員の指導などを通じて自己努力によってこの壁を突破するが、若干の院生はこの時点で挫折するものがある。就職から進学に進路変更した院生は、大学院での学びに思考回路を切り替えずに就職活動の挫折をそのまま引きずり、大学院をモラトリアム期間として授業にも関心を示さないようでは、他の院生に対して悪影響を与える。

文学研究科における FD 活動として早急に取り組むべき問題として、立命館大学のように大学院のコース制度を導入する方法もあるが、文学研究科としては、大学院における教育理念を一層明確化して院生に示すと共に、大学院での勉学に支障をきたしている院生に対して、勉学・研究面での補助するシステムを構築すること考えねばならない。さらに、学部との教育・研究の連続性を維持するために学部 FD 委員会との関係を強めていく必要もある。

本報告で述べた問題の一部は、すでに文学研究科で討議され実行に移されているが、多くは筆者の私見であり、今後検討されるべき問題を含んでいることを最後に申し添えておく。

法学研究科の FD 活動の現状と課題

脇田 滋 (法学研究科教務主任)

法学研究科では、各教員やコース（またはファッハ）の教員グループが、各院生の状況を踏まえて創意工夫を重ねつつ実に熱心に教育を行っています。しかし、研究科の位置づけの大きな変化と院生の多様化の中で、教育やFD面での研究科全体の共通課題については模索を続けているのが実情です。

法学研究科の基本的性格と教育のあり方は、設置以降、約40年近くの間実に大きく変化してきました。1972年、大学院設置からしばらくの間は、きわめて少人数の院生を対象に研究者養成を目的に教育を行っていました。1985年からは、それ以外に専門職業能力養成も合わせて位置づけ、研究科の性格が大きく変わることになりました。その一環として社会人学生も積極的に受入れ、2003年度からはNPO・地方行政研究コースを開設し、地域公共政策のスペシャリスト育成にも力を注いできました。2008年度からは、法学、政治学、NPO・地方行政研究、アジア・アフリカ総合研究プログラムの4コースに再編しています。

現在では法学研究科の教育内容は実に多彩になるとともに、院生の状況も多様に分かれることになりました。各コース所属による違いも重なり、大まかに言えば、①学部からの進学者、②研究者志望者、③外国人留学生、④社会人院生（NPO・地方行政コース）、

⑤社会人院生（税理士志望者）、⑥社会人院生（その他・一般）といったグループに分かれており、それぞれに関心や教育への要望が大きく異なっています。

その結果、各分野やコースでは、それぞれ院生の実情に応じた教育実践が行われていますが、研究者養成時代や法務研究科と比べると、法学研究科共通の教育やFD活動の意義やあり方が分かりにくくなっている面があることは否定できません。

こうした困難はありますが、法学研究科全体としては、次の二つを位置づけ、これが教育面で大きな効果をあげています。

一つは、多様化した院生の要望を聞く機会をもつことです。具体的には、院生協議会との話し合いを持ち、年度の早い時期に大学院担当教員が院生との懇談会を開催しています。

もう一つは、一貫して継続し、堅持している修士論文中間発表会の実施です。研究科全体としての発表会とはなっていませんが、関連分野毎に毎年10～11月に開かれ、指導担当教員以外に、関連分野教員、多くの院生が出席し、教員からの厳しい問題点指摘や議論を通じて大きな教育効果をあげています。教員同士も、この発表会を通じて教育方法や内容についての交流を行う絶好の機会となっています。



深草学舎

学部 FD 活動紹介

社会学部の FD 活動

山邊 朗子（社会学部教務主任）

社会学部では、2009年度から社会学科、コミュニティマネジメント学科、地域福祉学科と臨床福祉学科の4学科で初年次教育の充実に取り組んできました。まず、初年次生が初年次小人数クラスで活用できる、大学教育や専門教育の入門ガイドブックを各学科（地域福祉学科と臨床福祉学科は合同）で作成し、活用しました。さらに、初年次小人数クラスの教育を上級生がサポートできるようゼミサポーター制度を作り（2008年度より）、少人数クラスでより近い年齢、立場からの新生へへの支援を展開しています。

今年度は、これらのガイドブックを各学科の少人数クラスでさらに活用しています。また、学科によっては、講義科目でも入門用の教材を作成し、授業を行っています。また、社会学部の構成員で組織されている社会学部学会でも、新生が読むことが望ましい古典や基本図書をやさしく解説した、「リーディングブックレット」を作成しています。

また学科によっては、非常勤の先生方と学科の教員と話し合うことで、連携を密にし、授業における課題を共有することを目的に、非常勤講師懇

談会を開催しています。

昨年度に引き続き、FD報告会ではこのような初年次用の教材について報告しあい、取り組みを共有する予定にしています。今年度はさらに、新たな教材の紹介と、既存の教材の授業での活用のあり方について報告を行います。

さらに、社会学部でも、初年次教育の取り組みに加えて、大学教育の出口となるキャリア形成の課題への取り組みの必要性を認識していますが、今年度のFD講演会では、キャリア教育に関する教職員の基本的な理解を深めるために、キャリア教育研究・実践の専門家をお招きし、キャリア教育の概要と「大学の教員がキャリア教育をどう考えるべきか」についてお話をさせていただきます。また、社会学研究科と合同で、増加しつつある留学生の教育をめぐって、留学生のためのライティング、リーディング能力の向上への取り組み方法について講演会を企画しています。

まだまだ不十分ですが、以上のようなFD活動を通じて、社会学部の教育を向上させ、社会学部での一貫した体系的な教育を構築していきたいと考えています。

国際文化学部における FD 活動の現状

清水 耕介 (国際文化学部教務主任)

国際文化学部においては、各学期に1回ずつの公開授業を行っています。本学部においては、一部の教員同士がお互いの授業を見学することは比較的頻繁に行われてきたため、FD活動の中でまた新たに公開授業を設定しなくてもよいのではないかという意見もありましたが、正式に公開授業を設定することによって、これまでそうした活動に参加してこなかった教員も関心を持つであろうことから、この形でのFDを行うことにしました。

前期の公開授業においては、主として中規模の授業を対象とした公開授業を実施しました。また、公開授業週間の後にFD研究会を開催し、FD活動の中で学んだことはもちろんFDのあり方・公開授業の設定の仕方等について議論を重ねました。その中で、各自の担当する授業が多くなっている現状においてはなかなか設定された公開授業に出席する時間を調整することが難しかったことなどが報告されました。

後期の公開授業においてはクラス規模を度外視し、学部生が最も関心のある授業公開することにしました。具体的には、アンケート調査を行いその結果において3位までにノミネートされた教員の授業を公開授業として設定することにしました。アンケート調査においては、楽に単位が取れる授

業ではなく、内容的に他の学部生に推薦したい科目は何であるかという質問に答えてもらう形にしました。母数が少ないため学部全体についての包括的な分析ではありませんが、後期の公開授業についてのアンケート結果からは以下のような仮説を考えることができます。第一に、学部生の推薦する上位の授業の担当教員はゼミの応募者も多いことから、学生が良い授業であると理解している授業とゼミの応募状況との間には何らかの相関関係があると思われること。第二に、しかしながら今回のアンケートで名前がなかった教員でも人気ゼミがあることから、教員の人柄、ゼミの雰囲気等其他の要因もゼミ選択に影響していると考えられること、第三に、今回選ばれた教員は研究業績も優れていることから、学生が興味を持つ授業と研究活動との間にも何らかの相関関係があると考えられること、などです。

公開授業は12月第3週の木曜日に1~4時間目に連続して実施され、クラス規模はそれぞれ100~200人でした。まだ実現していないのですが、公開授業についてのFD研究会を開催し、これから詳しい総括を行いたいと考えています。

本学部では、これからも公開授業を中心としたFD活動を精力的に続けていきたいと考えています。



瀬田学舎

研修 参加記



報告 1

研修名：日本私立大学連盟主催
「平成 22 年度 FD 推進会議（新任専任教員向け）」
日 程：8 / 11（水）～ 12（木）
場 所：グランドホテル浜松
参加者：渡辺めぐみ（社会学部講師）

報告 2

研修名：日本私立大学連盟主催
「平成 22 年度 FD 推進会議 キャリアガイダンスと教職員の職能開発
～学生の自律を支援する FD と SD ～（専任教職員向け）」
日 程：6 / 26（土）
場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス
参加者：原 俊和（キャリア開発部課長）

報告 3

研修名：京都 FD 開発推進センター主催
「2010 年度夏季海外視察調査・研修」
日 程：8 / 21（土）～ 29（日）
場 所：オーストラリア／メルボルン
参加者：築地達郎（社会学部准教授）

報告 4

研修名：京都 FD 開発推進センター主催
「新任教員合同研修プログラム」
日 程：9 / 18（土）～ 19（日）
場 所：キャンパスプラザ京都
参加者：大原盛樹（経済学部准教授）

報告 1

日本私立大学連盟主催
「平成 22 年度 FD 推進会議（新任専任教員向け）」に参加して

渡辺めぐみ（社会学部講師）

日本私立大学連盟による、平成 22 年度 FD 推進会議（新任専任教員向け・8 月 11 日（水）～ 12 日（木）、於グランドホテル浜松）に参加しました。1 日目はパネルディスカッション等を通じて、意見交換を行いました。2 日目は、模擬授業の検討会が行われ、講義スキルについて学びました。

私は、FD を、各大学および各学部のめざすところの「市民の育成」を実現するために、よりよいカリキュラムの構築や、教育活動の向上を図る研究・実践であると理解しています。教育活動は、講義だけでなく、ゼミ、実習、課外活動等さまざまな場面で行われていますので、その都度、学生ひとり一人

とのコミュニケーションを図り、信頼関係を築き上げることが根幹にあると考えます。その上で、学生が課題を達成するためのよりよい方法・環境づくりを追究していくことが必要だと思います。

さらに、教員と学生との関係は半期の講義で終了するものではなく、教員は学生の卒業後、10 年、20 年先を見据え、真摯に向き合っていかなければなりません。したがって、FD は、講義スキル・学生満足度の向上といった短期レベルの課題にとどまらず、長期的視野をもって取り組むべきものであると認識しています。

報告 2

日本私立大学連盟主催
「平成 22 年度 FD 推進会議 キャリアガイダンスと教職員の職能開発～学生の自律を支援する FD と SD ～（専任教職員向け）」に参加して

原 俊和（キャリア開発部課長）

早期化・長期化・厳選採用のキーワードで象徴されるように、現在の就職・雇用状況は、まさに「超氷河期」であります。そのような厳しい状況を背景に、この度、「キャリアガイダンスと教職員の職能開発～学生の自律を支援する FD と SD ～」として、平成 22 年度の FD 推進会議が開催されました。

今回は 2 本の基調講演とグループ討議が行われ、基調講演では、同志社大学から圓月勝博氏、立命館大学から浅野昭人氏の両名をお招きし、大学設置基準改正によるキャリアガイダンスの義務化のお話から、キャリア教育の取り組みや課題、社会が学生に求める能力とその修得にかかる教職員の役割などについて講演されました。感想として、それぞれ「学士力」と「就業力」をキーワードに話され、それらの能力の重要性を再認識させられたと同時に、教育職員・事務職員、そして学部・キャリアセンターが協働し、全学課題として取り組む必要性を感じました。

その後、教育職員・事務職員が混在したグループ

に分かれ、各大学のキャリア支援やキャリア教育等の課題や取り組み事例が紹介された後、意見交換を行いました。教員・事務それぞれの立場からだけでなく、規模や分野などが異なる様々な大学からの意見を聞くことができたのは貴重な機会でありました。特に、「キャリア」の文言についての討議においては、ある大学職員の「『キャリア』とは『生き方』のことであり、『キャリア支援』とは『生き方支援』のことである」との発言が印象に残りました。私も常々思っていることですが、「キャリア教育＝就業教育」と捉えられている方をよくお見かけしますが、キャリア教育とは、就職のためだけの教育ではなく、人間らしく生きるための教育であると、改めて認識することができました。

この会議に参加して、今後も事務職員としての能力開発に取り組み、教員・事務職員が協働して、より良いキャリア支援環境を構築してけるよう、さらに努力して参りたいと強く感じました。

研修参加記

報告 3

米 FD は教育強化と研究強化が両輪 「2010 年度夏季海外視察調査・研修」に参加して

築地 達郎（社会学部准教授）

この夏、「京都 FD 開発推進センター」の研修として米ボストンの中堅大学がつくるコンソーシアム「カレッジズ・オブ・フェンウェイ」（COF）を訪問する機会に恵まれました。野球場名として有名な市中心部の公園「フェンウェイパーク」の杜に抱かれるようにして、6つの大学が個性を競い合っていました。

ボストンでも FD は“発展途上”のようでした。日本と同様、初年次教育法の開発や教育効果をいかに評価するかといった問題に直面していました。また、教員間の熱意の差に話題が及ぶと、COF 側の幹部の方々の表情は一様に曇るのでした。

大学間連携による FD も緒についたばかりのようで、この分野で一日の長がある京都側に対して熱烈なラブコールが送られました。今後、京都とボストンが共同で FD 活動を重ねていくことが合意されま

した。

ところで個人的に印象的だったのは、COF 側が「教育者としての能力開発」と「研究者としての能力開発」を、FD 活動の両輪に位置づけていたことです。我々が FD = 教育力強化と認識しているのとは、対照的でした。

とくに最近では実務家を教員として登用する機会が増えているため、着任後数年にわたって研究者になるためのトレーニングをしなければならないという問題意識が高まっているとのこと。先輩教員をチューターにして、研究費獲得方法などを実地で指導するようです。

私も実務家出身ですので、身につまされると同時に、たいへん羨ましく感じました。

報告 4

京都 FD 開発推進センター主催 「新任教員合同研修プログラム」の研修参加報告

大原 盛樹（経済学部准教授）

後期授業が始まる直前の9月中旬、京都 FD 開発推進センター主催の FD 研修会に参加しました。同センターは年2回、在京都私大の新任教員向けに FD を基礎的な理念から学ぶ機会を提供しています。私は本年4月から本学の専任教員になりましたが、それ以前は政府系の研究所で17年間、専門テーマに取り組む日々を送っていました。4月から前期の授業を開始しましたが、本学のような中堅私学で多様な関心と学力水準、学習習慣を持つ多数の学部生を教える上で、これまで培ったスキルの多くが役立つことを思い知りました。授業の運営はうまくいかず、学生の評価も低かったのです。後期の授業を立て直すにあたり、改善点もよく分からず、藁にもすがる思いでこの研修会に参加したのです。2日にわたる研修では、FD の基本的理念の説明からモデル授業の受講、グループによる実践とディスカッションまで、かなり密度の濃い学習を行いました。学生中心の目線や具体的な目標設定による動機付け

（特にシラバスのデザイン）など、自分が学ぶ側に立つと、その必要性がよくわかりました。研修で提示される考え方や具体例の一つ一つについて、私はそれと真反対のことをやっていたことがわかりました。自らを猛省するだけでなく、ワークショップではそれを他の研修者の前でさらさねばなりません。正直言ってとても疲れました。だが収穫は大きかったです。個別の研修内容は省略しますが、研修を指導してくださった各大学のベテラン教授も悩みながら試行錯誤を繰り返されていること（いい授業をするのはそれほど難しいということ）、私よりずっと若い新任教員の方々が FD に対する意識が高いように思えたこと、そして個人の FD 研修だけでなく、学部全体のポリシーの確立と共有において、各大学（特に本学）がまだこれから本格的な努力をせねばならない段階にあるとわかったことが印象的でした。

2011 年度 学部 FD・大学院 FD 自己応募研究プロジェクト 第二次募集のご案内

大学教育開発センターでは、教育改革を推進する一環として、学内のグループ又は個人がおこなう大学教育に関する研究及び授業・教材等の研究開発を奨励するため、自己応募研究プロジェクトを実施し、それに係る経費を支援しております。つきましては、以下のとおり 2011 年度学部 FD・大学院 FD 自己応募プロジェクトの第二次募集をおこなっておりますので、奮ってご応募ください。

学部 FD

応募資格

- 研究代表者は本学専任（特任含む）教育職員とする。共同研究者は専任・非常勤講師を問わない。
- 本学における教育全般、授業、教材等の研究開発（FD）を行おうとするグループまたは個人。

応募条件

- 開発成果に汎用性のあること。
- 下記内容の範囲内であること。
- 申請額 30 万円を上限とする。

<対象内容>

a. 大学教育研究

- (1) 大学全般に関わるもの（学部が主体となるもの）
- (2) 複数研究科・学部等に関わるもの（学部が主体となるもの）

b. 授業研究

- (1) 教材に関するもの —教材作成・教材開発・テキスト作成—
- (2) 手法に関するもの —実験的授業・学生討論会実施・授業法改善—

※各教学責任主体（各学部、教養教育科目、学部共通コース、教職課程）に係るものについては、別途予算措置がなされているので本事業の対象とはしない。

○計画は複数年度でも可とするが、採用は単年度とする。したがって、継続して事業を行う場合でも毎年応募・選考するものとし、年度によっては自己応募研究プロジェクトとして採択されないこともある。なお、継続事業の場合は申請書の他に年次計画書（様式任意）を添付すること。

選考方法

2011 年 3 月上旬実施予定のヒアリング（学部 FD 運営委員会委員による）を経て、3 月中旬開催の学部 FD 会議にて審議し、決定する。（ヒアリングでは、① FD 研究として目的は妥当かどうか、② FD 研究として研究内容が妥当かどうか、③研究成果の大学全体への波及効果について、④予算の使途・適切性について等を伺う。）

応募締切 2011 年 2 月 25 日（金）

申請書提出先：大学教育開発センター（事務窓口：教学企画部）

申請書類

応募に必要な申請書類は、大学教育開発センターにて配付する。また、大学教育開発センター Web（http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/biz_content/images/self_2011_a.pdf）からもダウンロードできる。

原則として応募できるプロジェクトは 1 人あたり 1 プロジェクトのみとする。

問い合わせ先

大学教育開発センター（事務所管：教学企画部 e-mail: dche@ad.ryukoku.ac.jp
直通電話番号 075-645-2163 担当：杉山、野澤 内線 1050、1052）

研究発表会での報告及び報告書の提出

研究発表会を年度末（2 月～3 月頃を予定）に実施し、全プロジェクトが報告する。また、発表会后 3 月中旬までに報告書類（様式については別途指示）を提出する。この報告書はセンターにて「FD・教材等研究開発報告書」として刊行し、FD に関する勉強会、研究会、交流会等で発表・利用することがある。

大学院 FD

応募資格

- 研究代表者は本学専任（特任含む）教育職員とする。共同研究者は専任・非常勤講師を問わない。
- 本学における教育全般、授業、教材等の研究開発（FD）を行おうとするグループまたは個人。

応募条件

- 開発成果に汎用性のあること。
- 下記内容の範囲内であること。
- 申請額 30 万円を上限とする。

<対象内容>

a. 大学教育研究

- (1) 大学全般に関わるもの（大学院が主体となるもの）
- (2) 複数研究科・学部等に関わるもの（大学院が主体となるもの）

b. 授業研究

- (1) 教材に関するもの —教材作成・教材開発・テキスト作成—
- (2) 手法に関するもの —実験的授業・学生討論会実施・授業法改善—

※各研究科の教学責任主体に係るものについては、別途予算措置がなされているので本事業の対象とはしない。

○計画は複数年度でも可とするが、採用は単年度とする。したがって、継続して事業を行う場合でも毎年応募・選考するものとし、年度によっては自己応募研究プロジェクトとして採択されないこともある。なお、継続事業の場合は申請書の他に年次計画書（様式任意）を添付すること。

選考方法

2011 年 3 月上旬実施予定のヒアリング（学部 FD 運営委員会委員による）を経て、3 月中旬開催の大学院 FD 会議にて審議し、決定する。（ヒアリングでは、① FD 研究として目的は妥当かどうか、② FD 研究として研究内容が妥当かどうか、③研究成果の大学全体への波及効果について、④予算の使途・適切性について等を伺う。）

新着図書紹介

大学教育開発センターでは、FDに関する様々な資料図書を購入しています。貸し出しも行っていきますので、どうぞご利用ください。また、購入図書の希望も募っていますので、ご希望があればお知らせください。



大学の實力 2011

著 者：読売新聞教育取材班

出版社：中央公論新社

出版年月：2010/9/25

【目 次】

- ・第1章 「受かる大学」ではなく「行くべき大学」を探す—大学を選ぶ基本的視点
- ・第2章 大学入試の種類と、大学の選び方
- ・第3章 あの手この手の学習支援策
- ・第4章 学生を孤立させないために
- ・第5章 大学が取り組む「教育力」の真の姿
- ・第6章 大学の選び方—「学生支援」の目線から
- ・第7章 大学の選び方—学生たちの視点から
- ・第8章 退学率をめぐるさまざまな問題
- ・第9章 就職支援に苦闘する大学
- ・第10章 「就業力」とは？
- ・第11章 「職員力」も実力のうち
- ・第12章 ようこそ「自由の府」へ



大学の危機

—日本は21世紀の人材を養成しているか—

著 者：草原克豪

出版社：弘文堂

出版年月：2010/11/15

【目 次】

- I 21世紀の大学改革は何を目指すのか
- II 大学は教養ある社会人を育成しているか
- III 大学は質の高い専門家を養成しているか
- IV 大学は知見の創造者を育成しているか
- V 大学は多様な人生設計を可能にしているか
- VI 政府は大学支援の責任を果たしているか
- VII 未来への志を育てる